資料紹介

「髙木幹朗研究室スライドフィルム」について

―新山下と堀割川の景観―

松本　和樹（非文字資料研究センター　研究協力者）

はじめに

「髙木幹朗研究室スライドフィルム」について、これまで『非文字資料研究センターNews Letter』の45号・46号で紹介してきた。45号では、「髙木幹朗研究室スライドフィルム」の特徴である、河川運河の定点観測を中心に紹介した。46号では、現在も開発が進められているみなとみらい地区を中心に現在との比較を行った。今回は、過去2回の資料紹介で触れなかった、新山下方面や堀割川、根岸湾を中心にスライドフィルムの画像を紹介する。

1　山下ふ頭・本牧ふ頭と新山下の貯木場

（1）山下ふ頭と本牧ふ頭

山下ふ頭は、1953（昭和28）年、「横浜港拡張計画」によりアメリカ軍に接収されていた瑞穂ふ頭の代替として建設が着手され、その後、横浜港の入港船舶トン数の増加に対応するために拡張が進み、1962（昭和37）年度末には10バースを有する「東洋一の輸出埠頭」が完成。1965（昭和40）年には国鉄貨物線の臨港鉄道が、新港ふ頭から山下公園前を横切って山下ふ頭まで延長された（『都市横浜の半世紀』）。

本牧ふ頭は、1963（昭和38）年度の「港湾整備五ヵ年計画」にもとづく国の直轄事業として建設が着工され、コンテナ輸送に対応する形で拡張が進み、1970（昭和45）年に20バースがしゅん工。1973（昭和48）年にコンテナ・ターミナルが完成し、山下ふ頭に代わる横浜港の主力ふ頭となった（『都市横浜の半世紀』）。

T-76-25

T-75-16

T-76-25は山下ふ頭の入口を撮影したもの。コンテナを積んだトラックがふ頭内を走っている。T-75-16は本牧ふ頭内を撮影したもの。画面左側に横浜共立倉庫、画面奥に小港団地が見える。

（2）新山下の貯木場

新山下の貯木場は、戦前の1933（昭和8）年に完成した。関東大震災後の復興事業で、米国産の丸太や製材品などが大量に輸入されたものの、貯木施設が無いことから、これらの木材は市内の河川に係留保管された。ところが、次第に港内の公有水面に係留された木材が港内交通や港湾荷役の大きな障害となった。そのため、横浜市は中区新山下町の地先を埋め立てて市営貯木場の造成に着手し、1933年12月、当時最新式の設備を有する貯木場が完成した（『神奈川県の近代化遺産』）。

貯木場は新山下町地先の海面に造成され、現在の中区新山下3丁目側には、四方を台形状に囲った保管堀が設けられた。潮位の変動に関係なく保管堀の水位を一定に保つため、横浜港と保管堀の間には閘門が設置された（『神奈川県の近代化遺産』）。

完成した貯木場は、輸入木材の東京への回漕で活況を呈した。第二次世界大戦中には木材輸入が停止したため、保管堀は他用途に転用されたが、戦後には再び貯木場としての機能を回復した。その後、昭和30年代以降、外国産木材が大量に輸入されるようになり、昭和40年代に輸入の最盛期を迎えると、新山下の貯木場も神奈川県内や関東一円での材木需要から常時満杯となり、貯木場として十分な機能を果たすことが難しくなった。そのた

T-75-12

T-75-13

T-75-14

T-75-15

め、1974（昭和49）年、金沢地先の埋め立てにあわせて、金沢区にふ頭施設、貯木施設、木材センターを包含した金沢木材専用港が建設され、貯木場の機能は移転。1998（平成10）年には埋め立てがしゅん工した（『神奈川県の近代化遺産』）。

現在、新山下の貯木場の名残は、横浜市営バスの停留所名（「貯木場前」）や、現存する閘門などにうかがうことができる。

髙木幹朗研究室スライドフィルムが撮影した貯木場の画像からは、現在は埋め立てられてしまった貯木場の様子をうかがうことができる。T-75-12は新山下1丁目から貯木場を撮影したもの。右側に藤木企業株式会社の倉庫、奥に本牧ふ頭のA突堤も見ることができる。T-75-13は、貯木場を、新山下3丁目側から山下ふ頭方面を向いて撮影したもの。画面奥側中央に閘門、画面右奥に横浜新港倉庫が見える。T-75-14は、貯木場を、新山下3丁目側から本牧ふ頭A突堤方面を向いて撮影したもの。画面奥左側に大日通運の倉庫が見える。T-75-15は、貯木場を、新山下3丁目側から本牧ふ頭B突堤方面を向いて撮影したもの。住友倉庫や昭和梱包運輸の倉庫が見える。

2　新山下運河

新山下運河は、1923（大正12）年の中区山下町地先の埋め立てで新山下町が新設された際に造成された人工の運河で、運河沿いには倉庫群が設けられた。

T-76-39は、運河に架かる霞橋から山下ふ頭方面を撮影した画像。画面左側に国際倉庫株式会社の新山下保税倉庫。正面に見えるのが山下ふ頭。T-76-40は、霞橋から新開橋方面を撮影した画像。画面左側に乾倉庫株式会社、右側に宇徳運輸株式会社の倉庫を確認できる。T-75-20は、新山下運河側から中区小港町の小港団地を撮影したもの。画面右側には後述するベイサイドコートの施設も写っている。

現在、倉庫群の並んでいた区域には量販店が進出し、横浜市も「新山下運河に面するウォーターフロントの立地を生かして、市民が豊かな時間を過ごせる、賑わいの

T-76-39

T-76-40

T-75-20

ある街づくり」を目指した計画を構想するなど、再開発が進められている（「新山下第一地区　街づくり協定」）。

3　ベイサイドコート

T-76-21 の画像は、新山下 3 丁目で撮影したもの。手前の自動車群は、京浜倉庫株式会社運輸部の新山下町営業所と思われる。その向こう、道路（山下本牧磯子線）を挟んだ対面側に“BAYSIDE COURTS”と書かれたアーチを見ることができる。新山下 3 丁目の内陸側、見晴トンネルの左側から中区小港町 1 丁目との町境までの区域は、1980 年代までアメリカ軍が接収し、“BAYSIDE COURTS”（以下「ベイサイドコート」）と呼ばれていた。

1981（昭和 56）年 6 月の『横浜市と米軍基地』によれば、この地域は 1945（昭和 20）年 12 月、旧日本海軍の資材置場として使用されていたものをアメリカ軍が通信大隊地区として接収した。その後 1956（昭和 31）年 5 月に中心市街地の接収解除の代替施設として、通信大隊地区内の一部に国費で鉄筋コンクリート建アパートの住宅を建設し、ここをベイサイドコートとして分離した。1960（昭和 35）年には通信大隊地区とベイサイドコートが統合され、この区域全体が新山下住宅地区となった（『横浜市と米軍基地　昭和 56 年 6 月』）。ベイサイドコート（新山下住宅地区）はアメリカ海軍横須賀基地分遣隊の管理下にあって、独身将校の宿舎、出入国のアメリカ軍人・軍属とその家族の一時的な宿舎として使用され、図書館、将校クラブなどの付属施設が設けられた（『横浜・中区史』）。

T-76-17 は、新山下運河から対面の新山下 3 丁目を撮影したもの。運河に接する京浜倉庫株式会社運輸部新山下町営業所の向こう側にベイサイドコートの施設を見ることができる。

新山下住宅地区は、その後 1977（昭和 52）年に返還が合意され、1982（昭和 57）年 3 月に区域全部が返還された（『横浜市と米軍基地　昭和 57 年 6 月』）。

T-76-21

T-76-17

4　港の見える丘公園

港の見える丘公園は、1962（昭和 37）年 5 月に中区山手町に開園した。この場所は幕末にイギリス軍が駐屯し、その後は外国病院などに用いられ、1942（昭和 17）年に永代借地権が回収されたが、戦時中は「防諜」のため立ち入りが禁止され、戦後は 1956（昭和 31）年まで接収されていた。横浜市は国有地の貸与を受けるとともに、隣接するイギリス領事官敷地を買収して公園を造成し、流行歌「港が見える丘」にちなんで命名した（『都市横浜の半世紀』）。

T-76-27 は、港の見える丘公園のフランス山地区の入口を撮影したもの。公園の内、フランス山地区の側は

1971（昭和46）年に敷地買収で拡大された（『都市横浜の半世紀』）。

T-75-26は、港の見える丘公園から横浜港の新山下方面を撮影したもの。画面左側に山下ふ頭、正面に乾倉庫の倉庫群、乾倉庫の眼前から左側の海面にかけて新山下の貯木場を見ることができる。乾倉庫の眼前の海面は、その後高速道路建設予定地とされ、現在は首都高速道路が上空を走っている。高速道路は、港の見える丘公園から見える横浜港の景観を大きく変え、現在では新山下を通る首都高速道路や横浜ベイブリッジも、景観を構成する要素の一つとなっている。

T-76-27

T-75-26

5　堀割川

堀割川は、久良岐橋・池下橋付近で中村川と分流し、根岸湾に注ぐ延長2.7キロメートルの人工運河で、1870（明治3）年に着工、1874（明治7）年に完成し、舟運路として重要な役割を果たした。1923（大正12）年の関東大震災で護岸の破壊や橋の焼失などの被害を受けると、昭和初期の震災復興事業で護岸は石積みで復旧され、各所に荷揚場や階段などがつくられた。橋も架け替えられ、それぞれに意匠を凝らした親柱が設置された。明治初期に開削されて横浜市の水運に大きな役割を果たし、震災復興期の河川改修工事の様態をほぼ全面的に残していることから、2010（平成22）年度の土木学会選奨土木遺産に選出された（『堀割川　歴史と魅力』）。

髙木研究室は、橋梁や護岸沿いから堀割川の定点観測を行っており、荷揚場や階段などの遺構も撮影している。

T-77-31は、中村川と堀割川の合流地点を撮影したもの。画面手前右側に中村川と池下橋、画面左奥側に堀割川と中村橋が見える。現在、池下橋の上空には高速道路が走っている。

T-76-143は、中村橋から天神橋の間の堀割川の右岸を撮影したもの。岸壁には、昭和初期に整備された荷揚場と石積みの階段が見える（『堀割川　歴史と魅力』）。T-76-144は、荷揚場を別の角度から撮影したもの。

T-77-120は坂下橋と磯子橋の間の堀割川の右岸を撮影したもの。画像正面に見える水路跡は、明治期にヘルム・ドック（造船所）から堀割川へ船を通すために整備されたもの（『堀割川　歴史と魅力』）。T-77-123は坂下橋方面から磯子橋方面を撮影したもので、画面奥側に根岸湾の日本石油精製根岸製油所が見える。画面右手側に見えるのが前述の水路の跡で、水路跡に架かる橋（矢倉橋）の部分が他の道に比べて盛り上がっていることがわかる。

T-77-215は、八幡橋下流側の階段護岸を撮影したもの。階段護岸は昭和初期に船に乗り降りするための昇降場として造られた。八幡橋は関東大震災後の1928

T-77-31

T-76-143

T-76-144

T-77-120

T-77-123

T-77-215

（昭和３）年にしゅん工された橋で、画像にはしゅん工時の親柱が写っている（『堀割川　歴史と魅力』）。

6　根岸湾

堀割川が注いだ根岸湾は、1955（昭和30）年頃には約３億円の水揚げ実績をあげる漁港だったが、臨海工業地帯造成のための埋立事業が計画された。地元の漁業組合との協議の結果、埋立事業は1958（昭和33）年度末に第１期の造成工事に着工、1963（昭和38）年末にしゅん工した。埋立事業の完了した地区の内、中区千鳥町から磯子区鳳町にかけての区域には、日本石油精製根岸製油所が進出した（『都市横浜の半世紀』）。

T-76-128からは、手前に横浜市民ヨットハーバー、その奥に日本石油精製根岸製油所を見ることができる。ヨットハーバーは、1940（昭和15）年のオリンピック東京大会のヨット競技の予定地として新山下町の海岸に建設され、1939（昭和14）年に完成。オリンピックが返上されたため、オリンピックで使用されることはなかったが、1939年の第10回明治神宮国民体育大会や、1959（昭和34）年の第14回国民体育大会のヨット会場に使用され、市民からも親しまれた。しかし、本牧ふ頭の建設によって移転を余儀なくされ、1968（昭和43）年３月に根岸湾に移転した（『横浜・中区史』）。

T-76-128

おわりに

これまで３回にわたって「髙木幹朗研究室スライドフィルム」について紹介してきた。45号で紹介したように、髙木幹朗研究室は“運河のある風景”が大きく変貌し始める、景観の変貌の局面を捉えようとした。

今回紹介した新山下も、1970年代後半には高速道路の建設や貯木場の埋立て、ヨットハーバーの移転などで、景観は大きく変貌した。また、ベイサイドコートや港の見える丘公園のように、米軍による接収とその解除も横浜の景観の変貌に関わっていた。

一方で、堀割川を撮影したスライドフィルムからは、川の周囲の景観は変貌したものの、護岸部分の景観は震

災復興事業後の面影を残していることがわかる。

このように、「髙木幹朗研究室スライドフィルム」は、景観の何が変貌し、何が残されているかを、画像に残された様々な情報から読み取ることができる。3 回の資料紹介を通じて、『横浜港における船上生活者の歴史的変容―オーラルヒストリーからのアプローチ―』刊行時点では撮影場所が不明瞭だった箇所についても、様々な情報を集めることで特定が進んだ。スライドフィルムの活用に向けて、今後も一点一点の画像の撮影場所や年代、画像に記録された情報を明らかにしていきたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、ベイサイドコートに関する資料・文献についてご教示いただいた横浜市中央図書館調査資料課レファレンス担当に厚くお礼申し上げます。

【参考文献】
経済地図社『中区明細地図（南）　昭和 53 年度版』、1978 年。
横浜市総務局渉外部編『横浜市と米軍基地　昭和 56 年 6 月』、1981 年。
横浜市総務局渉外部編『横浜市と米軍基地　昭和 57 年 6 月』、1982 年。
中区制 50 周年記念事業実行委員会編『横浜・中区史　人びとが語る激動の歴史』、1985 年。
高村直助『都市横浜の半世紀―震災復興から高度成長まで―』有隣堂、2006 年。
横浜市磯子区区政推進課編『堀割川　歴史と魅力―土木学会選奨土木遺産―』、2011 年。
神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課『神奈川県の近代化遺産―神奈川県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書―』、2012 年。
港湾局山下ふ頭再開発調整室山下ふ頭再開発調整課「新山下第一地区街づくり協定」（https://www.city.yokohama.lg.jp/kanko-bunka/minato/yokohamako/gaiyo/shinyamashita/dai1/kyoutei.html）2021 年 10 月閲覧。

地図1　『横浜の埋立』〈区分図 A-2〉（部分）
（出典）横浜市港湾局臨海開発部 / 編集・発行『横浜の埋立』1992 年　横浜市提供
（注）本画像は、横浜市港湾局に利用許可を得た上で掲載しています。